

双語教育

世界的に国民国家の限界が論じられ、その形成に大きな役割を果たしてきた学校教育の目的の喪失も問題となっている。また、少数民族の復権とあいまって、教育は多文化教育に目を向けざるを得なくなっている。多文化といってもかなり問題を抱えているが、少なくともそれを具体的に保障するものとして自民族の言語による教育がある。欧米では移民などの子弟に対してバイリンガル教育が行われている。中国ではかなり歴史的事情が異なっているが、自民族語による教育を保障しながら、国家統合のために少数民族にも中国語（漢語）習得が義務づけられている。また、漢民族の圧倒的な経済的・政治的・社会的力のため、少数民族言語は消滅の危機にある。憲法で少数民族の文化は尊重されているにもかかわらず、現実には人口的にも九〇％を占める漢民族に飲み込まれようとしている。単純に図式化すると以上のようなようになるが、これに対して少数民族、ウイグル人はどのように考えているのだろうか。

中国では少数民族に対して「双語教育」という名の下に、小学校の初期から民族語と平行して漢語（中国語）が教えられている。それに対して、ウイグルではそのような押し付けは民族の文化を阻害しているとして、政治的な問題にもなっている。⁽¹⁾ だが、一方では、進学や就職など子どもの将来を考えると、漢語は早く身につけていた方がよいとする実際の立場が増えている。清朝の時に始められた漢語教育だが、この時代のウイグル側の反発に比べると現在は隔世の感がある。漢語教育の進展に対して、ウイグル文化の危機と考える人も存在するが、多くの人は漢語習得は利益になると考えている。だが、漢人と中国政府に対する不満がやわらいだわけではない。むしろ開放政策の中で、漢人との経済的な競争によって、社会主義的な平等感が崩れ、ウイグル人の不満は強くなり、民族意識も高まっている。

清朝の時代には、あれほど漢語教育に対して反発していたウイグル人が、積極的にともみえる漢語教育の受け入れになぜ変わっていったか。ウイグル人にとって、漢語教育の進展はウイグル語の衰退につながるか。また、かれらの民族的アイデンティティの中にウイグル語という言語はどのような地位を占めているか。さらに世界的な教育の潮流として多言語教育が重要視されているが、国家の基盤として多民族・多言語政

策を取ってきた中国が、この方向に少数民族教育を發展させていくことができるかどうか。漢語教育の歴史、ソビエトとの言語政策の比較、新疆ウイグル自治区での現地調査資料などの分析を通してこれらの問題を考えていきたい。論点は言語の現在性、言語の道具的側面とアイデンティティの側面、言語の商品化、資本化である。

ウイグル近代教育のはじまり―新方式の学校

クリミア・タタールのイスマイル・ガスプリンスキーは無知と因習に束縛されたムスリム社会を改革し、ロシアにおけるムスリムの地位向上と権利獲得をはかるために近代的な学校を開いた。それはロシア文明の挑戦にこたえる意味もあり、またオスマン帝国の末期の民族主義の影響もあった。

この学校で行われた「新方式」と呼ばれる教育方法はジャディードの運動として、「共通トルコ語」とともにトルコ諸語を母国語とする「トルコ人」意識を覚醒させることになった。ロシア当局はこの運動に汎トルコ主義、汎イスラム主義の危険性を認め統制を強化した。それは一九一〇年頃の東トルキスタンの都市であるカシュガルやグルジヤにも伝わってきた。もともとジャディード運動はロシアの同化政策に対して起こされたのであるが、ここ東トルキスタンでも、清朝の漢語学校による漢化政策に対する危機感が存在していた。またこの学校を支えた経済的有力者層がロシア貿易などで形成され、旧態依然たるイスラムの宗教学校への不満もあった。新方式も漢語学校による「漢化」への危機感よりは、むしろイスラム社会内部の啓蒙運動である。また、新方式の教育は宗教と民族を辱めているスウェーデン・ミッシヨンの活動への対策であると主張している。中国による支配を明確に否定することはなかった。漢語学校は、生徒が集まらないことから、閉鎖縮小され、一九一〇年代のカシュガルではほとんど問題とされていない。この新教育を妨害したのは対立するイスラムの保守派であり、むしろ、イスラム保守派の密告、中傷により、中国当局の弾圧を招き、この弾圧に反発する形で民族運動が生じた。⁽²⁾

その中の一つ、フセイン学校では金曜日を休日にしてイスラムの影響を残しながらも近代的な知識とウイグル語、ロシア語などを教えた。⁽³⁾

また、トルファンでは、富裕な商人、マフスット・ムヒティが同じように新方式で学校を開いた。それは中華民国時代の新疆の支配者楊增新（一九一〇―一九一三）の少し前から始まっていた。マフスットは中央アジアを旅し、タタール人の知識人を連れてき

て学校を開いた。地理、歴史、体育、算数、筆記、自然科学などがウイグル語で教えられていた。生徒たちは自分の村に教師として帰り、学校を建てた。(4)

中国当局の弾圧により新方式の教育は一応終わるが、後述するように「ウイグル文化促進会」などの「会立学校」にその精神は受け継がれていく。

イスラム宗教学校

イスラム教育で重要なものはマドラサ（高等教育機関）とマクタブ（初等学校）である。マドラサでは神学、法学、詩、習字、計算などが教えられ、実学などはなかった。マクタブでは八―一〇歳になると子どもは学校へ送られ、宗教の授業、ペルシャ語、トルコ語で本を読み書きすることを学んだ。(5)

カシユガル城市にマクタブは七〇―八〇校あり、コーランやアラビア語、ペルシャ語の暗唱を偏重するため、生徒はその意味を解せず、卒業した生徒のほとんどが文字を書くことが出来なかった。

今ではこのような学校は政府によって禁止されている。一九九七年に訪ねたホータンの学校の玄関には、学校関係者はイスラムに関係することを禁止する掲示が大きく書かれてあった。学校制度と宗教は厳格に分離されている。政府は新疆での最近の民族問題に関する事件は宗教が関係しているとして、宗教活動に制限を加えている。(6)

調査では、八〇才以上の人は女性も男性も、イスラム学校に行った経験がある。先の記述ではイスラム学校は役に立たないという印象が強いが、インタビューでは必ずしもそうではない。あるイスラム医は自分の祖父は、イスラム学校で勉強しながら医学を学んだといていた。ウイグル医学の基礎を成す古典はアラブ語で書かれてあるから、アラブ語をイスラム学校で学んだのであろう。

小さいころ両親が亡くなったので、兄によって育てられた、イスラム学校に行つて、十二歳で結婚、仕事ばかりで遊んだ記憶はない。婚前に男の人を見たり、話したりすることはない。十六歳で長女を出産して、全部で九人を生んだ。(八十歳位、女性、カシユガルの農村)。

イスラム学校に行つてコーランは読めるけれども、意味は分からない(八十歳位、女性、アトシュの農村、バクシのような民間療法師)

十五歳―十八歳のときイスラム学校に行った、コーランの読み方を学んだ(九十歳

位、男性、カシュガルの農村)

十三歳―十四歳のときコーランの勉強にイスラム学校に行った。字は書ける。国民党の軍隊に入つて、ホータン城に一年間いたが、きびしいから女装して逃げた。(一八歳、男性、ホータンの農村)。

学校教育制度―義塾

東トルキスタンでは、以前、伝統的な自治制度で運営されていたが、一八八四年に清朝が新疆省において、直接的な支配に乗り出してきた。これまでは、各地で地方ムスリム政権の反乱が相次いだ、その大きなものがヤクープ・ベク(一八二〇―七七)である。このころはロシアや英国などがアジア進出をねらい、その影響が新疆にもおよんでいた。ムスリムの反乱は左宗棠(一八一二―八五)によって、また英露の駆け引きによって鎮圧され、新疆省がしかれた、これは近代国家が国境確定によって成立するという、ヨーロッパの国家概念の影響でもあった。

この清朝による直接的支配の影響は教育制度に見ることができるといえる。左宗棠は各地に「義塾を設立し、ウイグル族(この名称はこの時代はなく、纏頭回とよばれていた)の風俗を移して華風に同化せしめんとして、漢語教育を実施した。」(一八七八) これまでは、間接統治で、ウイグルイスラム社会と、漢族社会は隔離され、住民の習俗も尊重されていたが、これ以後は漢化の道を歩むことになる。(7)

新疆省という行政組織を作つても、言語が通じなくては統治困難であるから、通訳養成の意味も学校にはあった。その当時、イスラムの教律では漢語を習うものはコーランを読むことが禁止された、ゆえにウイグル語の文書であれば、これをムラーが読み、通訳がこれを訳す、というように直接訳さなかった。通訳は義塾から選抜されたが、給料が極めて安く、さらに役人になると同じ民族から疑惑の目を向けられるので、志願するものは少なかった。しかし、州の役人は義塾に行くように強制したので、金持ちの家は貧民の子弟を雇い、代わりに就学させた。ウイグル人たちは通学を差(職務)と考えていた。だから、開学して二十年たつても、漢族以外で行くものは少なかった。教育効果はほとんどなかったが、一握りの識字者であるムラーを創り出し、行政の末端に位置させた。教育予算も五万元ほどで、湖南省の中等学校一校分ではなかった。(8)

学堂

本格的に清朝が近代教育普及に乗り出したのは一九〇三年以後のことである。新疆省での普及はイスラム教徒の就学にかかっているので、次のような方針が立てられた。「ウイグル族の教化についてその礼俗を変え、宗教を改めることが今日の急務ではないとし、ウイグル語を重視し、師範学堂・法政学堂・中学堂の学生に学習せしめる。かつて義塾で見られた、教師が学生に暴行を加えるようなことを厳禁する。もし違犯した場合は厳罰に処する。学生には徭役の義務を免除する。纏師範学堂を設け、ウイグル族指導者を養成する。」(9)

一九〇八年頃から、初等小学堂にかわって普通教育機関の中心として漢語学堂が設立された。教育普及の行き詰まりをウイグル族の「言語不通」のためとし、その打開策が漢語・漢字の教育の導入であった。それは「強迫教育」であり、当初の基本方針「ウイグル語教育の完全な放棄・転換である。建設された学堂は六〇〇余り、生徒数一五〇〇〇人といわれていたが、これがそのまま運営されていたとはいえない。ウイグルイスラム社会否定の漢語教育であれば民衆は抵抗し、見せかけの従順で終わったのも当然であらう。」(10)

これらの学校の経験は調査ではあまり聞けなかった。ほとんどの人が行かなかったということかもしれない。

中華民国時代の郷村学校

一九二二年、清朝が終わり、中華民国になっても、新疆には変化は感じられなかった。学堂も成果をあげないまま一九三三年まで続いた。この年はカシユガルにつかの間の「東トルキスタン共和国」ができた年でもあり、盛世才がウルムチ政府の実権を握った年でもある。これ以前に一九二一年、ソ連のタシケントで開かれた諸民族会議で提唱され、盛世才の親ソ政策の時代から公用され、定着していった民族名としてウイグルという名前が出てきた。その特徴はトルコ系言語を使い、オアシスに定着した、イスラム教徒であり、新疆に住んでいる民族である。

この時代にウルムチ政権の文化教育方針がまとめられた。その目的は新疆各民族の文化教育を積極的に取り込み、すでに民族社会で活発になっている自発的な文化教育活動の主導権を乗っ取り、元来の民族主義的性格を変えようということにあった。先に述べたカシユガルなどでの新方式の教育に見られる民族主義的動きを指している。新方式の教育も、半年しか存続しなかった東トルキスタン共和国の滅亡とともに消え去った。

盛世才政府のもと、これまで、モスクに納められていた教育に関する税金を政府がいったん吸収し、それを用いて各地に少数民族の学校、「民族文化促進会」「民族教育事業」などが設立された。一九三五年から三八年まで、新疆省教育当局が設立した学校の数は、中等学校以上は一〇校、小学校は二一五校、民衆学校（成人に文字を教える学校）は五〇校に上る。各地のウイグル文化促進会によって設立されたウイグル学校は一九八〇校で生徒は一二万九六四九人であった。これらの学校は自民族語、算数、社会、地理、自然、経文、政府の六大政策などを科目としていた。高学年になると漢語が加わる。この時期は「新疆民族教育の黄金時代」ともいわれている。（11）

しかし、学校の経費は地元農民が負担し、相変わらず経済的には苦しく、この時期の学校はある程度の識字率を上げることでの役割を終えた。

《一九三四年―一九四二年全省学校学生数量增加統計表》によると、一九三四年には公立学校（校数一三五、生徒数一万二〇二九）だったのが一九四二年（校数七四〇、生徒数一〇万三二七九）には増えている。会立学校も一九三八年（校数一八四〇、生徒数一〇万五〇八七）だったのが一九四二年（校数二二一九、生徒数十八万三五人）になっている。（12）

中華人民共和国以後

学校教育が本格的に整備されてきたのはこの時期以後である。憲法の第1章に規定しているように、中華人民共和国は統一された多民族国家であり、各民族は平等で、各民族とも自己の言語文字を使用する自由を有する。

ただ現実には「革命」直後の混乱が続いた。社会を改革するため、新疆の旧時代は封建的農奴社会（ただしこの考え方はウイグル側の学者からの反論を受けた）と考えられ、全人口の八%の地主が五〇%の耕地を所有していたことから、悪霸地主などの摘発、人民裁判などが行われた。地主の土地は没収され、七三〇万ムーの土地が二一〇万の貧農に再分配された。

当時のことをホータンの先生は次のように説明していた。

自分の家は階級区分でいえば、中農の上だった。アクスからホータンへと解放軍が来た。土地は平等に配分された。地主は土地も家も出した。土地は無償で配分。家畜はその当時の価格で買い上げられた。貧農が集会で意見を言った。地主は抵抗しな

った。小学校に入学したときは、経済的に貧しかったが教科書やノートは無料で、食事も無料だった。解放後、学校ができたとき、皆理解できなかった。知識や教育が必要かどうかもわからなかった。支配者が変わったばかりだから、説明が必要だった。学校ができて誰も来なかった。家まで行って説明が必要だった。先生が足りなくて、中卒になった。小学四年生になったこともあった。でも今の小学生より質は高かった。文字を読めない大人のために夜のクラスもあった。イスラム学校も文化大革命のときまであった。

これらとともに、民族識別工作が行われた。これによって県レベル以上の民族自治区域の設立が可能かどうか調査された。これによって少数民族を全国的な政治支配機構に統合しようとした。また新疆において社会構造の基底にまで根をはっていたイスラム勢力（フージャ、アホン、ムラー、イマームなどイスラムの聖職者）を一掃する目的を持っていた。(13)

しかし、少数民族の幹部養成の教育機関として中央民族学院（現在は中央民族大学）が設立されたが、入学する学生は旧封建貴族、旧地主層の子弟が多かった。(14)

また、イスラム学校が全て無くなったわけでもなかった。では漢語教育はどうなったかというと、民国時代までの強制はなくなって、「固有の文字を持つ民族は、学校の各科目において、民族言語を用いて授業することを必須とし、少数民族の生徒が漢語を学習する問題については、各学校が地域の少数民族の需要と自由意志による志願に基づいて、漢語の授業を設けることになった」(一九五一年、少数民族教育会議)(15)

しかし、この後の一九五八年から新疆でも民族分離主義的傾向があらわれ、これを批判するため「民族問題の本質は階級問題である」の理論が強まり、民族に関する問題は階級に解消され、民族融合の考えが主流になった。民族問題は階級の消滅とともに無くなるというのが共産主義の理論である。この理論自体は誤りではないが、現実に存在する少数民族を無視することになった。それは漢語教育の押し付けになり、支配民族である漢化にすぎなかった。

長く続いた文化大革命で少数民族教育は大きな打撃を受けた。「小学校では、漢語を理解せぬ児童を対象に、教師が直接漢語による授業を行った結果、漢語の棒暗記や教科書の暗唱を強いることになった。そして多くの地域では入学率、定着率、試験の合格率の低い三低現象があった。識字率さえ低下していった。」(16)

しかし、民族問題の本質は階級問題であるという理論を、漢民族が支配階級で、少数民族が被支配階級であると、理解すれば現実にあっていた。もちろんこのような理解は中国当局側にあろうはずがないが、少数民族側にはあつた。「資本主義的世界経済は世界の労働力の民族集団への再編成を進行させ、個々の地域では人間がいくつかの民族集団―指標となるものが、肌の色であれ、言語であれ、宗教であれ、その他の文化的構成要素であれ―に分類されるようになった。個々の家族がどの民族集団に属しているかということと、その家族の職業および階級上の位置とは常に高い相関性が認められる傾向がある。このような階層化の原理こそ資本主義的世界経済の常に変わらない特徴である。」(17)

このように民族問題を階級もしくは階層に関連付ける理解はウイグルの場合でも必要であろう。文化大革命当時はわからないが、開放経済に移行してから後の、民族問題の発生の理解には必要な視点である。

ともかく現実の民族問題を無視して、あまりにも原理的に現実を改革しようとした文化大革命は終わりを告げ、少数民族教育も回復された。さらにソ連を手本に行われてきた民族融合政策を見直すことになった。しかし依然として識字率、経済的、技術的に立ち後れた少数民族も多いことが指摘された。その原因として民族語の教育が強調された反面、漢語のバイリンガル教育がおろそかになったことがあげられている。そして、主に経済の近代化を急ぐため漢語教育が強調された。

一九七八年に中央教育部の「全日制十中小学教育計画試行草案」によって、同年九月に開かれた全国外国語教育会議で、小学校三年から外国語を設けることが規定された。これをきっかけに、自治区政府は漢語学校では外国語、民族学校では「漢語教育」を実施した。漢語学校の外国語は停止されたが、民族学校の漢語はそのまま続いた。その目的は「民族間の交流言語である漢語を習熟し、さらに漢語という道具を利用してマルクス主義および現代科学文化知識を学習する」ことであつた。(18)

以上、ウイグルの近代教育の流れを漢語教育の変化とともに概観してきた。清朝や民国時代と違って、今は強圧的ではないが、実質的に早期の義務教育に漢語が組み込まれている。小学校の段階では民族教育も十分に行われるが、中学、高校、大学と進んでいくにつれ、漢語が段階的に増え、民族語は反比例して減っていく。このように考えると民族語(ウイグル語)と漢語が対立しているようにみえるが、この対立図式を少しのあいだ棚上げにして、漢語教育の歴史を振り返ってみたい。

先にも述べたように、ウイグルの近代教育の始まりは必ずしも、漢語教育の強制に対応するものではなかった。実施された漢語教育はほとんど効果なかったからである。本格的に漢語教育が始まったのは、文化大革命以後であり、それは近代化に向けての外国語教育として行われた。それが、小学校のときからカリキュラムに組み込まれることにウイグル側からどのような反応があったか、わからない。

現在では漢語教育は定着し、漢語習得に効果のある教育方法が考えられる段階である。漢語教育そのものに不快感を示す人もたしかに存在する。ホータンで、漢語の成績が悪いのは、その生徒の親が熱心でないからであるという先生がいた。そのような親はだいたい熱心なイスラム信者だけれども、知識がない。イスラム信者でも知識のある人は漢語教育の必要性をわかっている、といていた。

それに対して、教育委員会の人選だから教育方針に反対する意見はないだろうが、ウイグル人の五人の父兄とのインタビューでは、以下のような意見が出た

今の教科書は漢語が多いから勉強しないといけない。子どもはみな漢語がうまい。漢語を知らないとは知識を習得できない。ウイグル民族でも中国人だから漢語を勉強しなければならない。漢語の勉強は社会の発展と結びついている。週に三時間の授業では少ない。

清朝や民国時代とは違って、漢語教育に対する態度は変化してきている。漢語を受容する人が増えてきているといえる、少なくとも漢語に対する態度は、多様になってきている。それはウイグル人が一枚岩のように統合しているという固定観念を頭から取り去ればあたりまえのことであろう。将来はどうなるかわからないが、現時点でウイグル語による教育をなくそうという動きはない。

言語がナショナリズムの結集点になるのは、現在通用している言語状況を無視して無理に一つの公用語を作ろうとするときである。ウイグルでは現状としてはすでに「漢語公用化」がすすんでいるかもしれないが、たてまえとしてはウイグル語も公用語である。だから言語がウイグル・ナショナリズムの標的になりにくい。また政治問題化することもないであろう。

開放経済以来、ウイグル人も物事を現実的に、実際的にとらえ始めている。漢語も進学や就職や中国人との経済活動に欠かせない手段として考えている。進学や就職、経済

活動に無縁な人もウイグル人のなかにいる。農民の大部分はそうであろう。そのような階層と大学進学できる階層は違う。一九九〇年新疆で二〇歳から六〇歳までのあいだで大学卒は三・五%にすぎない。

しかし、農民層にも変化が出てきている。農業や牧畜だけで生活が成り立っていた時代の、ウイグルでの農村共同体なら、漢語の必要性は感じられなかったであろう。だが、ホータン、カシュガルでの農村の学校でのインタビューによれば現時点で農業を積極的に継承しようとする生徒は少なかった、先生も農業の将来に希望を持っている人はあまりいなかった。人民公社が解体され、責任請負制になって、農業でも個人的に生産拡大して利益を得ることが可能になっても、この地はオアシスを出れば砂漠が広がり、水の問題を解決しないと生産拡大は難しい。農産物の価格が低く設定され、ある意味では農民の犠牲で都市住民が経済成長できる仕組みになっている。これも農業に希望がもてない原因である。

今は、利益が上がる綿花、果物が増えているが、これも個人の力で増やすのは困難である。それよりも市場経済の波に乗って、パキスタンとの交易、など農業以外の経済活動が利益になると考えは始めている。農業に見切りをつける人が増えてきている。そうになると、漢語が必要になってくる。漢語を習う者はコーランを読むことを禁ずるといつていた時代からみれば、隔世の感がある。

少数民族の漢語教育

少数民族のバイリンガルの状況は、一方の極にウイグル、チベットなど、民族の多数が民族語を話し、バイリンガルは少数というタイプがあり、他方の極に、言語的には漢族に同化して自民族語を使用していないタイプがある（回族、満族）。そのあいだに、民族語とともに漢語も使えるという民族集団がいる。（19）

それに対応して漢語教育も多様な形を取る。ウイグルでは高校までは民族語で授業が行われ、大学でも民族語での講義がある。漢語は小学三年から始まる。他の少数民族に比べると漢語は普及していない、それは反面、自民族語で教育を行っているということである。ウイグルは他の少数民族に比べると、恵まれた状態にある。

内モンゴル自治区

この自治区もその名に反してモンゴル人の人口は三三八万人で、全体の一六%にしか

すぎない。漢民族が一七三〇万人と圧倒的に多い（一九九〇年）。このような状況でモンゴル語は漢語に押されて、危機的な状況にある。言語使用状況は次のようになっている。

- ① 民族語を失い言語的に漢化された人。首都のフフホト周辺に大量の漢族が移住したため、モンゴル語が消えた。モンゴル人の一二％になる。
- ② モンゴル語を第二言語とし、普段は漢語を使う人。都市部に多く、モンゴル語は家族のあいだだけ。
- ③ 漢語とモンゴル語の混合語を使う。
- ④ モンゴル語を話す人。伝統的な生活様式が残る牧畜地域に多い。

モンゴル人の子弟が漢語学校に通う流れは定着し、モンゴル語による教育の必要性もなくなるといわれている。その原因としてあげられているのは、

- ① 改革開放以来、少数民族のことばの使用範囲が狭くなってきている。
- ② 民族の言葉を学ぶことが社会的に重視されておらず、具体的な政策もない。
- ③ 進学するためには漢語学校に行く方が圧倒的に有利。
- ④ バイリンガルは負担が重く、最初から漢語だけで勉強する人も多い。
- ⑤ 大学、専門学校においてモンゴル語で講義する科目は極めて少ない。（20）

このような漢語優越の言語状況はモンゴル人の学生の民族性を刺激している。農業地域、牧畜、都市部でそのアイデンティティのあり方は違う。モンゴル語を忘れても、都市の学生は神話的歴史や仲間、またモンゴル革命に参加したかどうかアイデンティティを求めている。また、牧畜地域の学生は自分たちこそが真のモンゴル人だと考えている。（21）

「市場経済の影響はモンゴルと漢族の関係を変えている。以前は政治的だったものが経済的なものに変わっている。経済的地域主義と個人的プラグマティズムである。牧畜地域と農業地域の緊張が強くなっている、都市部での民族集団間の関係は文化大革命以来柔軟になっている。言語の使用、政治的権力、経済的資源、人口、地理的重要性などについて漢人の影響力はバランスを崩すほど大きくなっている。しかし、モンゴルのアイデンティティが危機的状況になる事はない、アイデンティティは究極的には心理的なものであり、時と場所に応じて変化するからである。」（22）

最近とくに漢人との「融合」が進んでいるようである。「自分たちの文字を使わなく

なった、風俗・習慣を失ってしまった、などと嘆いてみても始まらない。結局は自分たちの責任だから。またこんな歌が流行っている。モンゴル語がしゃべれなくても私はモンゴル人、民族衣装を着なくても私はモンゴル人、私はモンゴルを心から愛している。」(23) モンゴル人のアイデンティティはこの場合は漢人との対比のなかで形成されるのだから、民族語を忘れてもモンゴル人という心理はあるかもしれない。しかし、その民族的な差異がなくなってきたら、そして「蒙漢通婚」がすすんだら、モンゴルの民族的アイデンティティはその意味が変質するだろう。

シブソンパンナのタイ人

少数民族教育の歴史は中国においてはどこも似たような経過をたどる。ここでは伝統的には小乗仏教が教育を担っていたが、一九一一年中華民国の時代に、初めて学校ができた、しかし、通うのは漢人の子弟だけであった。一九五〇年に中華人民共和国になって本格的に学校教育が始まった。当初はタイ語で行われていたが、文化大革命で漢語に代わった。しかし、その後人民公社が無くなり責任請負制となって、子どもの労働力が必要となり、こどもは学校に来なくなった。再度タイ語を導入して、漢語の学習に結び付けて、タイ人にとっても学校を魅力的なものにしようとした。しかし、教育関係者の多くはタイ語の教育は一時的な必要性しか感じていない。

中国当局にとって少数民族の言語は漢語習得のための手段にしかすぎない。タイの文化の中核にあるタイの王と歴史、仏教、タイ語(タイ文字)は学校教育の中では無視されるか、小さな部分しか占めていない。後進性を脱しようと思えば、漢語の世界に入っていくしかない。それは、タイ人以外の文字を持たない少数民族にとっては特にそうである。

大部分のタイ人は学校教育を終了しない、途中で止める。一九九〇年のシブソンパンナ県で小学校の登録率は八九%、だが五五%しか卒業しない。少数民族は小学校の七六%、中学校の五八%、高校の三七%を占める。ウイグルと同じように高等教育に進むにつれて、少数民族の割合が低くなる。ここにも重点学校があるが、そこは教師も生徒もほとんど漢人である。

彼らにとって新しい方向は国境の向こうに、タイ国があり、そことの結びつきを留学などで深めていることである。小乗仏教というアイデンティティが開放経済の中で新しい意味を持つようとしている。(24)

チベット自治区

中国に属する以前は、チベットの教育は六二五九の僧院で、初等から高等まで教えていた。中国になってからは、ほとんど僧院での教育は廃止された。それとともに中国による学校制度が整えられたが就学率は低いし、非識字率も七三%である。

一九九七年五月、小学一年から漢語を導入することが報じられた。今までは小学三年から教えられていた。また、チベット大学では歴史をチベット語ではなく、漢語で教授されると発表された。全学生に課せられていたチベット語の入学試験も今年は外された。学生の八〇%がチベット人であるにもかかわらず、多くの授業が漢語で行われている。大学当局は多くの教材が漢語だから、という説明である。美術学部はチベット美術の研究をする場であるが漢語で教えられている。その理由は、漢人学生のためであり、学術語が漢語であることが多く、チベット語にはそれが無い。チベット語でしようと思つたら、莫大な資金をつぎ込んで本や辞書を翻訳しなければならない。

一九八八年チベット語は公用語と宣言された。高等教育機関、重要な会議、公式文書と看板は漢語とチベット語の併記、政府雇用の条件がチベット語に堪能であること、などが宣言されたが、それはほとんど実行されていない。将来の雇用は漢語ができないと不可能であり、中国の内地の中等教育機関に進学できる一六〇〇人の枠に入れてもらうために。チベット人のあいだで競争がおきている。

政府の見方ではチベット語は民族主義と結びつくという政治的なものである。また、共和国以前は封建的な奴隷制度を維持する道具であった。チベット語は仏教や迷信と関係すると中国政府は考えている。チベット語で物理、化学、数学を中等学校で教えた実験学校の生徒は八〇%が最終試験で合格した。漢語で教育を受けた他の学校は三九%の合格率であった。しかし、実験学校は中止された。

一九八六年、ラサの第一中等学校の二八のクラスの中で十二がチベット人である。生徒は九三三人がチベット人、五一八人が漢人である、漢人はチベット語を学習しない、チベット人中三八七人はチベット語を学習しない。五四六人だけが学習する。一一一人の教師の中で三〇人がチベット人で、七人がチベット語を教える。

チベット大学では四一三人がチベット人、二五八人が漢人である。二五一人がチベット語・文学を学び、二七人がチベット医学であり、一三五人が近代的な学科に属するのみである。

就職や進学にチベット語は余り役に立たないため、若い世代ではこの自分たちの民族語を学習しようとする意欲が無い。その学習機会も少なくなっている。チベット独自の文化や言語が漢文化に対抗して、分離独立運動に利用されているとして、中国当局は言語を政治的に考える傾向がある。(25)

少数民族と漢語教育

ウイグルに限らず、他の少数民族に関しても、優越する漢文化と漢語、その下に位置づけられる少数民族の言語と文化という図式は変わらない。漢語はたえず進歩、発展する現代科学を表し、少数民族の言語は伝統的な文化を表す。伝統的な文化に限定される限りに於いて、少数民族の言語や文化は尊重される。民族的な舞踊、歌、衣装など政治的に無害とみなされる部分に関しては尊重される。またこれらは、エスニック観光の資源でもある。ただし、宗教は厳しく制限される。それはウイグルにおいてもチベットにおいても民族運動の中心的な価値を構成してきたからである。

開放経済とともに若い世代を中心に、現実的で実際的な選択も増えてきている。言語を単なる手段として、どのような戦略を立てたら進学や就職に有利に働くかを先に考える。しかし、漢語を習得して、大学に行っても、市場原理の現在では必ずしも将来が約束されているわけではない。社会主義がめざしていた平等原理はだんだんと影が薄くなっていく。今の時点で競争するとなると、社会のいろいろなレベルで権力を握る漢族が断然有利である。

ホータンの先生が次のように言っていた。「大卒でも仕事がない。成績が良いのはウルムチに行く。大体は農村部で小中学校の先生になる。両親が公務員だと仕事を見つけやすい。いまは漢族が多くなって仕事が見つけにくい。新疆医学院を卒業してもホータンの農村部の病院しか仕事がない。漢族は中心部の病院に勤められる。主な企業には漢族がいる。平等でない。でも政府がやることだから仕方がない。」

ウイグル、モンゴル、タイ、チベットの少数民族にとって、開放経済、グローバル化が救いになるのは、隣国とのつながりを深めることであろう。それぞれの民族は宗教や言語など、いろいろな点でつながりを持つ民族が多数存在するからである。また、これら四つの民族は少数民族といっても、長い歴史と「国」を形成した経験を持ち、文字を持っていて。それだけに、漢語に飲み込まれる抵抗感は強いようである。

文字を持たない少数民族(ジノー、アカなど)は漢語習得は重要だと思っている。民

族語の学習は時間のむだという。タイと違って、漢人に対して開放的であり、学校でも前向きである。かれらは学校制度こそが貧困と後進性を抜け出す唯一の道だとみなしている。(26) 全体的にいえば、漢語を習得しようという方向は多くの少数民族の選択と折りつつある。

朝鮮族は、中国の少数民族の中でも教育程度が高い。一九四九年には中国初の少数民族大学として延辺大学が設立されている。その民族でも、開放経済政策が進行するなかで、出世や経済活動のため朝鮮語より漢語の方を優先するといった問題が起きている。朝鮮語が少ない地域では、朝鮮語を知らない子どもが増加し、朝鮮族以外との結婚も増加する傾向にある。ソ連時代に中央アジアに強制的に移住させられた朝鮮族も、その地に適応し、ロシア語も習得し、社会的にも成功し、高い階層にいる。世界のどこに行っても、教育を重視し、適応能力が高い。

ベトナムに国境を接する広西壮族自治区の壮族の幹部は子供の教育のために、壮語ではなく漢語を学ばせたいと思っている。この地域に限らず少数民族の言語の社会的重要性が減少し、民族語とバイリンガル教育の発展の妨げになっている。(27)

しかし、子の将来を思って、親が現実的な選択をしたとしても、子供がそのままになり漢語を習得できるわけではない。雲南省のナシ族において実験的に次のようなバイリンガル教育が試みられた。ナシ族の小学校では一、二学年ではナシ語で授業が行われ、三、四学年ではナシ語が減っていき、五、六学年ではほとんど漢語で行われる。ここではナシ語は「劣った言語」として扱われ、カリキュラムからも排除されていく。これに対して、パイロット計画では一学年から六学年まですべてバイリンガルで行われる。ただし、一学年の漢語の割合は三〇%で六学年では九〇%に増える。このようにして漢語への移行をスムーズにしようとする。この計画ではナシ語は威信のあるものとして考えられている。そして、漢語の成績はこの計画で教育された生徒のほうが良いという結果を出している。(28)

注

(1) 高等教育の教科書はほとんど漢語で書かれてある。入学試験も漢語で行われる。

だから進学を望むウイグル人は小学校から漢語学校へ行く。そのようなウイグル

人はウイグル語を正しく話せない。いつも漢語で話し、伝統を忘れ、他のウイグル人の評判が悪い。漢語学校は設備もよく、教員の質も高い。英語、ロシア語、日本語が学習できる。民族学校は暖房の設備もままならない。(Eastern Turkestan Information, 1997, ヨーロッパに本部を持つ海外のウイグル民族運動によって公開されているインターネット資料) ウイグルでは中国語という表現より漢語という方が多い。以下、漢語学校、民族学校という用語が出てくるが、これは通称であり、それぞれ、漢語もしくは民族語で教育が行われているという意味である。

- (2) 大石慎一郎、一九九六、カシュガルにおけるジャヤデイド運動―ムーサー・バヨフ家と新方式教育―、東洋学報、第七八巻第一号、一四―一五頁。
- (3) リズワン・アブリミテイ、一九九四、「中国新疆ウイグル自治区における少数民族の教育に関する研究」、福岡教育大学修士論文、四二頁。
- (4) Rudelson, J. J., 一九九七, 'Oasis Identities- Uyghur Nationalism along China's Silk Road', Columbia U.P., p. 55.
- (5) 佐口透、一九九五、新疆ムスリム研究、吉川弘文館、四七頁。
- (6) 近代のイスラム学校の状況はわからないことが多い。研究自体も政治的に困難である。「南疆の葉城県では一九七九年には、一五〇人しかいなかったイスラム学校の学生が八九年には七〇〇人を越え、新疆全体では一万人になった。イスラム学校では、新疆に東トルキスタン共和国を創るため終生闘うという教育を受けている」(毛利和子、一九九三、「揺らぐ多民族国家―中国」神奈川大学評論、八一頁) これは一九九二年「新疆の民族分裂主義的問題についての社会学的考察」というタイトルで「新疆大学学报」に掲載された論文からの引用である。事実としてそのような宗教的動きがあるかは不明であるが、この論文自体も公安工作強化の政治的論文である。
- (7) 片岡一忠、一九九一、清朝新疆統治研究、雄山閣、二〇二頁。
- (8) 林培根、一九七五、新疆事情、韓国書籍センター、一八三―一八四頁。
- (9) 片岡、前掲書、三一〇頁。
- (10) 同上、三二七頁。

- (11) 王柯、一九九五、東トルキスタン共和国研究、東大出版会、八九頁。
 - (12) 新疆維吾爾自治區編輯組、一九七九、南疆農村社会、新疆人民出版社、一九八頁(中文)。
 - (13) 加々美光行、一九八六、現代中国のゆくえ、アジア経済研究所、一五―一七頁。
 - (14) 斎藤秋男、一九七五、中国教育史、田畑書店、二七九頁。
 - (15) リズワン、前掲書
 - (16) 庄司博史、一九八七、文字創製・改革にみた中国少数民族政策、国立民俗学博物館研究報告、一二―四、一二〇二頁。
 - (17) ウォーラーステイン、I. 川北稔訳、一九九七、史的システムとしての資本主義、岩波書店、一六九頁。
 - (18) リズワン・アブリミテイ、一九九八、ウイグル人の「漢語教育」に対する意識の変化(未発表)。
 - (19) Zhou Yaowen, 1992, Bilingualism and bilingual education in China, *International Journal of Sociology of Language*, vol. 97, pp. 38-40
 - (20) フレルバートル、一九九七、内モンゴル自治区の民族教育をめぐる諸問題、田中克彦他編、「言語・国家、そして権力」、新世社、九七―一〇五頁。
 - (21) Bochigud, W., 1995, The impact of urban ethnic education on modern Mongolian ethnicity, 1949-966, S. Harrell (ed), *Cultural encounters on China's ethnic frontiers*, pp. 298-300.
 - (22) Naran Bilik, 1996, Mongol-Han relation in a new configuration of social evolution, 1996 AAS Abstracts: China session 141.
 - (23) 朝日新聞、一九九八年六月十五日(夕刊)
 - (24) Hansen, M. H., 1999, *Lessons in being Chinese*, University of Washington Press, pp. 25-30.
 - (25) 'Tibet News Digest' vol. 17, vol. 19, vol. 22'
- Tempa Tsering, 1998, National report on Tibet women, 6, *Tibetan Woman and Education*.
- <http://www.ciolek.com/WWWVLPages/TibPages/TibetWomen-Report.html>

- (26) Hansen, M. H., *op. cit.*
- (27) Jin Lin, 1997, Policies and practices of bilingual education for the minorities in China, *Journal of multilingual and multicultural development*, vol.18, no. 3. p.196.
- (28) Feurer, H. 1996, Bilingual education among minority nationalities in China, A study of the Naxi pilot project at Yilong, Yunnan` RELC *Jornal*, vol. 27, no. 1, pp. 2-3.